

エルヴェシウスに対するルソーおよびディドロの 哲学・教育論争について

—フランス啓蒙思想における認識・道徳・能力の諸問題—
(その4)

永 治 日 出 雄
Hideo NAGAYA

(教育学教室)

I エルヴェシウスに対するルソーの批判

1. エルヴェシウスに対するルソーの態度
2. 『《精神論》への覚書』におけるエルヴェシウスへの批判
3. 『フェーブル草稿』におけるエルヴェシウスへの批判
4. 『エミール』におけるエルヴェシウスへの批判
5. 『新エロイズ』におけるエルヴェシウスへの批判

(以上研究報告第25輯, 1976年3月)

II ルソーに対するエルヴェシウスの批判

1. ルソーの『覚書』に対するエルヴェシウスの態度
2. 『人間論』執筆の構想と刊行への経緯
3. 『人間論』におけるルソーへの批判 その1—一般的特徴
4. 『人間論』におけるルソーへの批判 その2—能力の問題をめぐる
5. 『人間論』におけるルソーへの批判 その3—道徳の問題をめぐる
6. 『人間論』におけるルソーへの批判 その4—その他の問題に関連して

(以上研究報告第26輯, 1977年3月)

III エルヴェシウスに対するディドロの批判(上)

1. エルヴェシウスとディドロの関係 その1—従来の評価について
2. エルヴェシウスとディドロの関係 その2—『精神論』等の執筆をめぐる
3. 『《精神論》への考察』におけるエルヴェシウス批判

(以上研究報告第27輯, 1978年3月)

IV エルヴェシウスに対するディドロの批判(中)

1. エルヴェシウス著『人間論』の刊行とディドロによる『人間論』の検討

『人間論—人間の知的能力と教育』(以下は『人間論』と略称する)の初版については、一般的な解説から専門の研究書にいたるまで、ほとんどが刊行の時期を1772年と記して

いる。カーンによるもっとも権威ある評伝やカミングによる教育思想研究も同様であることは、この事実を疑いないものと信じさせる。^(注1)しかし、これらエルヴェシウスの研究者は、実際に1772年版の『人間論』を手にしたであろうか。たしかにダランベールがフリードリッヒ二世に宛てた1772年8月22日付書簡には、この遺作が印刷に付せられたと報告され、^(注2)また同じ年にエルヴェシウス著『幸福』の序文として公にされたサン・ランベールの伝記『エルヴェシウスの生涯と著作』にも、『人間論』の標題と内容が紹介されている。^(注3)しかし、エルヴェシウスの作品について、刊行の経緯と諸版本の体裁を網羅的に調査したスミスは、1772年の表記を有する『人間論』をいまだ発見できないと発表した。^(注4)私もまたパリ国立図書館や大英博物館をはじめ、ヨーロッパの多数の研究施設で渉猟に努めたが、古くとも1773年版の『人間論』を確認したにすぎない。公共の図書館に限っても、他の版本がかなり保存されているのに、初版だけ見当らぬことも奇妙である。ヨーロッパの古書店で1773年版の『人間論』を初版として伝えている事実も無視できないと思う。

発行年を1772と印刷された『人間論』を発見するか、それに匹敵する明確な証拠を見出さないかぎり、初版を1773年とみなすのが適切と私には感じられる。この作品を出版する事業は、エルヴェシウスの没後まもなくオランダで始まるが、印行のため意外に沢山の月日を要したらしい。グリム、ディドロ、マイステル、レナルらによる『芸芸・哲学・批評通信』(以下は『芸芸通信』と略称する)の1772年11月15日号は、エルヴェシウスの遺作が公刊されることを伝えているものの、その個所の表現は未来形である。^(注5)新しく現われる出版物にきわめて鋭い感度を持ち、エルヴェシウスの生活や著作にも関心の浅からぬ『芸芸通信』の執筆者が、この時点で『人間論』を未刊と考えている。また出版元であるレーがロビネから受けとった手紙も、翌年の2月にすらなお刊行されていない状態を示す。^(注6)

『人間論』の出版は『精神論』の場合と同じく、迫害の嵐を惹起する危険があった。エルヴェシウスは1767年の頃から草稿をニュールンベルグの学者に預け、まず独訳で公にする準備が始められた。しかし、ドイツの学者は仕事のなかばで没し、草稿はオランダに住むガリチン公に委ねられる。こうした経緯は詳らかでないが、1771年にはエルヴェシウスとオランダの間でなんらかの接触があったらしい。^(注7)その年の12月26日にエルヴェシウスが世を去った。やがてガリチンの庇護のもとにルフェーブル・ラロッシュが^(注8)校閲し、出版業者レーより『人間論』が上梓される。

最初に刊行された『人間論』は、縦17.5 cm、横9 cm、第一巻639頁、第二巻760頁である。発行年は1773、^(注9)発行地はロンドンと印刷されているが、実際にはまずオランダのハーグで陽の目をみた。スミスはこれを『人間論』No.1.と名付けている。彼の調査によれば、同じ年にこのほか三種の異本が出版されたらしく、これらはみな二冊本であるが、それぞれ紙型と頁数を異にしている。^(注10)翌年にはアムステルダムで三冊本が、またロンドンで二冊本および三冊本が刊行された。なお初版に尽力したとみられるルフェーブル・ラロッシュが、十二年後に^(注11)公刊されるディドー版全集で、オランダでの編纂を厳しく批判しているのも不思議である。

ロシア旅行への途上でハーグに滞在したディドロが、春に出版されたばかりの『人間論』に強い関心を寄せたことはさきに述べた。往復あわせ9ヶ月もハーグに留まったのは、オランダへの関心や健康の回復のためと思われる。ディドロの宿はほかならぬガリチン公

の邸宅であった。^(注12)このロシアの貴族はオランダに大使として派遣されていたが、以前からパリでの生活を愛し、文人墨客との交際を好んだらしい。^(注13)彼は『人間論』の刊行を援助し、それをカザリン二世に献呈した。^(注14)ディドロのロシア旅行や女帝との謁見についても、重要な役割を果たしたと考えられる。^(注15)

『人間論』の出版とディドロの旅行は偶然の一致であろうが、この書物の序文はディドロの筆によるとの噂も流れた様子である。しかし、ハーグで彼が努力を傾けたのは、むしろエルヴェシウスの遺作を綿密に批判することであった。1773年8月18日付書簡でディドロはデピネ夫人につきのように伝えている。

「この国でも私は決して時間を無駄にはしません。当地の住民についてきわめて面白い覚書をつくりました。エルヴェシウスの遺作に関しては、あらゆる頁の欄外を書き込みで埋めています。演劇を主題とする小冊子も、まとまった作品になりかけています。パリを出発するとき構想していた、小さな諷刺劇も楽しみながら書いております。少くとも二ヶ月か三ヶ月、グリムの『文芸通信』を維持する原稿が、お渡しできるとよいのですが……。」^(注17)

こうしてディドロが書き込みをした『人間論』は1773年版の二冊本とみられる。にもかかわらず、のちに発表される『エルヴェシウスの『人間論』への体系的反駁』（以下は『『人間論』への反駁』^(注18)と略称する）では、『人間論』からの引用は、1774年版の三冊本に頁数が照応する。これはいかなる理由に起因するのであろうか。1773年10月の『文芸通信』には、『人間論』^(注19)の入手がパリできわめて困難と記されており、このような事情と関連するかもしれない。

『『人間論』への反駁』は同じディドロの『ロシア大学案——あらゆる学問における公教育について』との関係で注目される。^(注20)カザリン二世との会見において、彼は教育改革の立案を依頼された。『人間論』の検討がたんに教育問題への関心から開始されとは考え難いが、ロシア女帝の懇請により拍車をかけられたことは確かである。『ロシア大学案』はペテルブルグ訪問の二年後に完成され、グリムを介してパリからカザリン二世に届けられた。^(注21)『『人間論』への反駁』の筆稿は、ロシア旅行の帰途でも、フランスに着いてからも書き続けられる。^(注22)ディドロ晩年のふたつの大作は、このような執筆の過程からしても、親密な関連をもつといえよう。

こうして晩年のディドロとエルヴェシウスの遺作が交叉する時点において、ガリチンはきわめて重要な役割を演じている。この人物をたんに文芸好きの貴族と考えてよいであろうか。彼の背後に存在するロシア女帝の強烈な牽引力と巧みな外交政策を、ようやく私は感じはじめています。

2. 『『人間論』への反駁』の版本と草稿

『『人間論』への反駁』の全体がはじめて公開されたのは、1875年のアセザ版全集においてである。アセザの解説によれば、最初の部分は1783年の『文芸通信』^(注23)に掲載され、のちにネジョンおよびヴァルフエルダンが若干の抜粋を発表した。

ディークマン、プルースト、ヴァルローの編纂により、ヘルマン社が1975年から刊行をはじめた全集を除けば、アセザ版はもっとも権威あるディドロの著作集と考えられる。しかし、彼の自筆草稿とアセザ版を照合したデスネは、『『人間論』への反駁』に関して、

193ヶ所の誤りを列記している。これらの異文はディドロの論旨を歪めるほどではないとしても、ときには個々の文章を非常に異なった意味へと導く。数行に及ぶ脱落すら存在する。^(注24)なお『ガルニエ古典叢書』に属するディドロの『哲学著作集』と『政治著作集』に、ヴェルニエールが『《人間論》への反駁』を抜粋している。ここではアセザ版の不備がそのまま踏襲された。しかし、おなじヴェルニエールが関与したルヴァンテール編『ディドロ全集』第十一巻においては、自筆原稿に依拠して従来の誤りが改められている。^(注25)1973年に完成したこの全集は、全体としての評価はあまり高くないが、『《人間論》への反駁』については、アセザ版よりはるかに秀れている。ヘルマン社の『ディドロ全集』ではデスネが校閲を担当すると思われるものの、エルヴェシウス批判を含む巻はまだ刊行されていない。ちなみにヴェルニエールの抜粋に基づく野沢協氏の抄訳のさいには、デスネの指摘を参考にして、^(注26)『ガルニエ古典叢書』の誤りがただされた。

問題のアセザ版の典拠は、コダールが作成し、エルミターージュに保存される写本、またはその写本の写本であろう。^(注27)しかし、『《人間論》への反駁』に関しては、このほか5種の稿本が存在する。いずれもディドロの長女であるヴァンドゥール夫人により伝えられ、現在はパリ国立図書館に蔵されている。なかでも重要なものは一組の自筆草稿（N. a. f. r. 13725）であり、さらにネジョンによる一組の写本および別人による三組の写本が含まれる。^(注28)こうした『ワンドゥール稿本集』を基礎として、デスネがアセザ版を批判したことはいうまでもない。ディドロの作品のなかでも、『《人間論》への反駁』の稿本はとくに豊富であり、この大作の重要性を示すともみられよう。

私もまたパリ国立図書館の稿本で、ディドロの自筆草稿を検討した。諸版本との文章の異同を点検するためもあるが、むしろ私の重要な目的は、著作としての完成度を考察することにあつた。『《人間論》への反駁』についてかねて私はふたつの疑問を抱いたのである。この作品はもともと公刊を予定したのではなく、個人的な覚書に近いのではなかろうか。また『文芸通信』への連載にあたっては、その後半はディドロの没後に発表されている。したがって論文の前半と後半の間には、仕上げとして精粗の差が認められないか。別の人物が編集したり改竄した部分があるかもしれない、と。

しかし、このような私の疑問は、自筆原稿を閲覧することによってほとんど氷解した。それは冒頭から最後に至るまで整然たる筆跡で記述され、加筆や抹消の箇所も特定のところに偏ってはいない。手書きであることを別とすれば、この稿本は公刊される書物とあまり変わらないのである。

3. 『文芸通信』に連載された『《人間論》への反駁』

ある作品がどのような形態で書かれ、どのような手段で発表されるかは、ときに重要な意味を帯びてくる。他者への論争や批判が主体となる場合はとくにそうであり、『《人間論》への反駁』もこうした観点から検討する必要があると感じられる。この著作が個人的な覚書でも、未整理の遺稿でもないことは、ディドロの自筆草稿により確認できた。それではディドロの作品は『文芸通信』にどのように連載されたであろうか。またそもそも『文芸通信』はどのような性格を有する文書であろうか。

こうした問題を解くために、『ヴァンドゥール稿本集』はほとんど役に立たない。そこでは『《人間論》への反駁』が一冊の著作として纏められ、分けけて連載された痕跡を

留めないからである。それゆえ『文芸通信』そのものを吟味する仕事はどうしても必要となる。

トゥルヌーは1877年に『文芸通信』を編集し、全十六巻として出版した。印刷された『文芸通信』ではこれをもっとも充実し、ほかに全六巻および全十五巻の抜粋も存在する。^(注29)しかし、残念なことにトゥルヌーはなんらの説明を付することなく、『《人間論》への反駁』の部分ですべて削除している。アセザ版全集などに含まれるディドロの作品は除き、^(注30)未刊の論述をできるだけ多く公にすることが、トゥルヌーの意図であつたらしい。スウェーデンのケルヴィング、ハルグレンらは諸版のさまざまな不備を指摘し、より忠実な原典と詳しい註解を作成しつつあるが、現在のところ1761年と1763年の部分が公刊されたにすぎない。

『文芸通信』の稿本としてもっとも権威のあるものは、ゴータの図書館に蔵されている。トゥルヌーもこのゴータ稿本を底本とした。ほかに十種ほどの稿本が存在し、なかでもパリ市歴史図書館が所蔵する『文芸通信』には評価が高い。^(注31)この稿本には専門の研究者も気付かず、近年にいたりヴァルローによって発見された。全部で二十六巻に綴られ、非常に美事な筆跡で書かれている。三年ほどの脱落はあるが、1763年から1793年までの時期に及ぶ。

東独にあるゴータ稿本を手にする機会はまだないが、パリ市歴史図書館へは赴くことができた。それは由緒あるマレー地区に位置し、セヴィニエ夫人の城館であったカルナヴァレ歴史博物館の向側を占める。フランスの図書館としては珍らしく館員も親切かつ機敏であり、赤い絨緞が敷かれた館内は典雅な雰囲気包まれている。

ルヴァンテール版の全集も『パリ市稿本』(mss. 3867~3870)を参考にした。そこに付せられた解説によると、『《人間論》への反駁』が『文芸通信』に掲載されたのは、1783年1月から1786年3月までであり、^(注32)1783年9月より1784年3月にかけて中断されたという。この解説は間違いのないであろうか。私はフランス哲学から学んだ懐疑的精神が、いかに大切であるかをここでも悟るのである。自身で『パリ市稿本』を占検した結果を、表Aとしてまとめてみよう。^(注33)

表A 「文芸通信」にディドロ著『《人間論》への反駁』が発表された経過

『文芸通信』の刊行年月	『《人間論》への反駁』の掲載回数(パリ市稿本における収録箇所)	批判の対象であるエルヴェシウス著『人間論』の該当箇所	備考
1783年1月	第1回(mss. 3867.f.1~5. <巻頭>)	序文から第1篇第7章まで	
2月	第2回(mss. 3867.f.21~27. <巻頭>)	第1篇第8章から第1篇後註まで	
3月	休 載		
4月	第3回(mss. 3867.f.67~74.)	第2篇第1章から同篇第7章まで	
5月	第4回(mss. 3867.f.87~93.)	第2篇第8章から同篇第12章(中途)まで	

永 治 日 出 雄

1783年6月	休 載		
7月	第5回 (mss. 3867.f. 115 ~ 121. <巻頭>)	第2篇第12章 (中途) から同篇第14章まで	
8月	休 載		
9月	第6回 (mss. 3867.f.159~165.)	第2篇第15章	
10月	休 載		
11月	休 載		
12月	休 載		
1784年1月	休 載		
2月	休 載		ディドロの病状悪化
3月	第7回 (mss. 3868.f. 67 ~ 73.)	第2篇第16章から第2篇後註まで	
4月	休 載		
5月	第8回 (mss. 3868.f. 128 ~ 137.)	第3篇第1章から第4篇第3章まで	
6月	休 載		
7月	休 載		31日にディドロは逝去
8月	第9回 (mss. 3868.f. 190 ~ 201.)	第4篇第4章から第4篇後註まで	はじめにディドロへの追悼文(無署名)を掲載
9月	休 載		
10月	第10回 (mss. 3868.f. 252 ~ 257.)	第5篇第1章から同篇後註まで	
11月	休 載		
12月	第11回 (mss. 3868.f. 302 ~ 306.)	第6篇第1章から同篇後註まで	
1785年1月	休 載		
2月	休 載		
3月	第12回 (mss. 3869.f. 42 ~ 46.<巻頭>)	第7篇第1章から第8篇第2章まで	
4月	休 載		
5月	第13回 (mss. 3869.f. 97 ~ 101.)	第8篇第3章から同篇第13章まで	
6月	休 載		
7月	休 載		
8月	第14回 (mss. 3869.f. 157 ~ 161.)	第8篇第14章から第9篇第19章まで	
9月	休 載		
10月	休 載		
11月	休 載		

1785年12月	休 載	
1786年1月	第15回 (mss. 3870. f. 13～16.)	第9篇第20章から第10篇第2章まで
2月	休 載	
3月	第16回 (mss. 3870. f. 63～66.)	第10篇第3章から要約まで

発刊のときから各月の1日および15日に出されていた『文芸通信』は、1773年になると月刊に変わった。ここで図表にした期間もそれは几張面に発行され、休刊となった月は存在しない。

この間の『文芸通信』において『〈人間論〉への反駁』は中心的な論稿であり、しばしば巻頭に置かれている。その論稿は間歇的に中断され、4ヶ月の休載が二度も見出される。ディドロの病気と急死がこうした中断の原因であろうが、それだけでは十分に説明できない。しかしながら、『〈人間論〉への反駁』の掲載は16回を数え、3年3ヶ月の長きに及んだ。この作品と『文芸通信』との関連の深さを、痛感せざるをえないのである。

4. 『文芸通信』の性格とディドロの役割

『文芸通信』がはじめて発行されたのは1753年3月15日である。数年前からパリに住むグリムは、ザクセン・ゴータ公に送られていたレナールの『文芸新報』に影響され、フランスにおける学芸の情報や論評を、ドイツの諸侯に提供しようと考えた。^(注34) ルソーの紹介によってグリムと知り合ったディドロも『文芸通信』に参加し、はやくも1753年8月15日号にその名が記されている。^(注35) 同年11月には『百科全書』第三巻の出版とこれに対する弾圧が報せられ、また1758年8月15日からはディドロの署名入りで『エルヴェシウスの〈精神論〉への考察』が三回にわたり掲載された。

『文芸通信』は手書きで写本がつくられ、通常は外交上の経路を利用して、またときには郵便によって、予約者のもとに送られた。^(注36) スウェーデンの研究者ケルヴィングは1761年の予約者として、ザクセン・ゴータ公ルイーヌ・ドロテ、スウェーデン女王ルイーヌ・ウルリークほか5名を確認できたという。^(注37) 1763年にフリードリッヒ二世が、またその直後にロシア女帝とポーランド国王が加わったことも確かである。

なお、今世紀のはじめに購読者の名簿が発見され、そこにはエルヴェシウスやネッケル夫妻も含まれると発表された。しかし、アメリカの研究者スミーレイは、この資料の信憑性を疑問としている。彼の著書『グリムに対するディドロの関係』によれば、『文芸通信』はフランスの国内には配布されず、もっぱら外国の王侯貴族に届けられた。^(注38) 現存する稿本の数と所在からみても、スミーレイの見解が妥当と思われる。この文書がたんに私的な書簡でないのは勿論としても、公刊される書物や雑誌と異なり、特殊な性格を有する事実留意すべきであろう。

『文芸通信』の中心はグリムとみなされるが、発行の実情はやや複雑である。スウェーデンの研究グループに属するハルグレンは、1763年の時点における協力者として、ディドロ、ダミラヴィル、デピネ夫人の三者を挙げ、さらに4名の写字生が働いたという。^(注39) しかも1771年からグリムは『文芸通信』の仕事をマイステルに譲り、ロシアでの外交的な

職務に専念した。^(注40)なお、この翌年にはレナール神父攻撃事件を頂点として、ディドロのうちにはグリムへの不信の感情が昂じ、両者の関係は冷却する。^(注41)こうした状況のなかで『文芸通信』におけるディドロの関与と比重は、ますます増大していく。

ディドロは1753年の当初より大半の号に寄稿しているが、そのほとんどは一回かぎりの小品や短評である。しかし、こうした作品とともに1773年の頃からは、かなりながい著作が連載されている。『セネカ論』や『ロシア大学論』のように別の形態で発表された作品もあるが、晩年の力作は『文芸通信』に載せられたものが多い。そうした著作と掲載の時期を表Bとして示してみよう。^(注42)

表B 「文芸通信」に発表されたディドロ晩年の主要な著作（1773年～1786年）

作 品 の 題 名	掲載された『文芸通信』の刊行年月
これはコントでない	1773年 4月
第二のコント	1773年 5月, 10月
ブーガンヴィル航海記補遺	1773年 9月, 10月 1774年 3月, 4月
哲学者と×××元師夫人との対話	1775年 4月, 5月
タキトゥスの欄外への覚書	1775年 8月, 9月
絵画・彫刻・建築・詩についての断想	1777年 2月, 3月, 6月
脚本と序幕	1777年 7月, 8月
白い鳥	1777年 10月, 11月, 12月 1778年 1月, 2月
諷刺第一	1778年 10月
運命論者ジャックとその主人	1778年 11月 1779年 1月, 2月, 3月, 4月, 5月, 6月, 7月, 10月, 11月, 12月 1780年 2月, 4月, 6月
スペインから追放されたジェズイット	1780年 4月, 5月
オランダへの旅行	1780年 11月, 12月 1781年 2月, 4月, 6月, 8月 1782年 2月, 4月
修道女	1780年 10月 1781年 1月, 3月, 5月, 7月, 9月, 11月 1782年 3月
1781年のサロン	1781年 10月, 11月, 12月
ダランベールとの対話（続き）	1782年 6月
ダランベールの夢	1782年 8月, 9月, 10月, 11月
エルヴェシウスの《人間論》への体系的反駁	1783年 1月, 2月, 4月, 5月, 7月, 9月 1784年 3月, 5月, 8月, 10月, 12月 1785年 3月, 5月, 8月 1786年 1月, 3月

ファルコネへの手紙	1786年 5月、7月、9月、10月 1787年 2月
(ヴァンドゥール夫人執筆、ディドロの生涯と著作についての回想)	1787年 3月、5月、7月、9月

ディドロにとって『文芸通信』が、自己の作品を発表する重要な手段とされたことは明瞭である。こうした事情により彼の文学的な名声はフランスよりもまずドイツにおいて確立されたという。^(注43) ディドロはこれらの作品を執筆するにあたって、直接の読者である外国の王侯貴族を意識しなかったであろうか。またこれらの作品を連載するにさいして、『文芸通信』の編集者となんらかの協議や打合せはなかったであろうか。

長編である『運命論者ジャックとその主人』を抜き、『《人間論》への反駁』は掲載の回数をもっとも多い。その第9回が発表された1784年8月号では、巻頭にディドロへの弔辞が掲げられている。マイステルの筆による一文と思われるが、タシュローが雑誌で公にするまでながく知られなかった。^(注44) この哀悼文はディドロが永眠した様子や『《人間論》への反駁』を連載した時期の状態を簡潔に語っている。

「この論文（『《人間論》への反駁』）を執筆している著名な人物はもはや地上にいない。彼は7月31日に世を去った。たえず望んでいたとおり、突然に訪れた安楽な最期である。ここ数年のあいだ衰弱して憂慮される状態に陥り、とりわけ6ヶ月前からは胸部の腫脹に脅やかされていたらしい。その病状は薬石の効も、彼を助けるのはこれまでと感じられた。しかし、生涯の最後の日には、むしろいつもより気分がよく、食欲もやや回復した様子である。その朝は友人のドルバック男爵ときわめて快活に、かなりながく話された。食卓についても陽気で、『これほど楽しく食事をするのはしばらく忘れていた』と夫人に語りかける。その言葉が終らないうちに、夫人は彼の眼から光が消え去るのを感じた。ただごとではないと気がついて、どこか具合が悪いかと尋ねられる。夫人への応えはもはや得られず、彼は生きることと苦しむことをやめたのである。^(注45)」

以上が追悼文の前半にあたるが、ここで述べられたディドロの最期は、彼の長女であるヴァンドゥール夫人の回想と、細部ではすこし異なっている。どちらも哲学者らしい清澄な臨終を伝えて感動的であるが、ヴァンドゥール夫人の記述に較べると、私はマイステルの表現に潤色を感じる。しかし、そうした表現も『文芸通信』の編集者が、ディドロに抱いた敬愛の念と哀惜の情から湧き出たと考えたい。ヴァンドゥール夫人の回想はつぎのように述べている。

「1784年7月30日土曜日に父は起床しました。午前中は婿や医師と談笑し、苦しんでいた発泡も治るかと思われたのです。食卓につき、スープとゆでた羊肉と菊ぢさを食べました。杏も手にしたので、母がそれを食べさせまいとします。『杏が毒になるとでも言うのかね。』父はそれを口に入れ、さらに砂糖煮の桜んぼうを食べようと、食卓に肘をかけ、軽く咳きこみました。どうしたかと母が尋ねます。黙っているので、顔をあげて、父を眺めました。もはや事切れていたのです。^(注46)」

ディドロが没した日についても、長女の回想と『文芸通信』の追悼文とは相違している。^(注47) モーレイによる伝記など、その日付を7月30日と記す研究書も少なくない。しかし、ディ

ドロ書簡集を編集したヴァルローは、その他の記録を検討し、1784年7月31日土曜日であると結論した。^(注48)

なお、奇妙なことに『文芸通信』のパリ市稿本では、故人ディドロを悼むヴァンドゥール夫人の回想の一部が、1784年6月号に収録されている。これは1787年3月から四回にわたり連載された回想が、製本のさいに誤まって混合したと思われる。強い愛情で結ばれていた親子の間柄で、長女が命日を間違えることはあっても、父親を喪くす二ヶ月も前に、哀悼の文章を公表したとは信じられないからである。

5. 「文芸通信」無署名論評におけるエルヴェシウスおよび「人間論」

『文芸通信』はエルヴェシウスの逝去と遺作の刊行について、数度にわたり無署名の論評を載せている。彼が世を去った翌月の1772年1月15日号、『幸福』が出版された直後の同年11月15日号、そして『人間論』が公刊されたあとの1773年11月号と12月号である。

さきに検討した『《精神論》への考察』は1758年8月15日から三回にわけて連載され、そこにも無署名のまえがきが付けられていた。この文章の筆者はグリムと思われる。『エルヴェシウス—その生涯と著作』の著者カーンは、1772年より以降の論評もグリムが記したと考えているが、^(注49)グリムは前年に『文芸通信』を離れており、^(注50)マイステルの筆になるのではないかと私は思う。これらの論評のなかでは、1772年1月15日の文章がもっともながく、エルヴェシウスの生活や作品についてかなり詳しく述べている。

「昨年(1771)の12月26日に痛風の発作のためエルヴェシウスが逝去した。これは私たちにとっては、不意の早過ぎた損失である。まだ彼は56才であった。好漢という言葉がフランス語になければ、エルヴェシウスのために発明してもよく、好漢の見本のように感じられた。公正で寛大で、不機嫌や悪意がなく、交際においても別け隔てを知らない。彼はあらゆる社会的な美徳を有し、人間の本性に関する深い認識にもとづいてそれを実践した。路上にいる悪人に腹をたてるのは、転ろがる石塊に憤慨するのと同様に、ばかげたことだと彼はいう。観念を一般化し、重大な結果しか気にしない習慣によって、善悪についてときに鈍感ではあるが、人々に対して彼はきわめて寛容であった。ただしその寛容は社会の個人的な過ちにのみ向けられ、公的な悪事には容赦なく打ち首や火炙りが宣せられた。いかなる場合にも姑息な手段を好まず、^(注51)ためらわずに伝家の宝刀、もっとも激しい治療法を用いようと考えたのである。」

エルヴェシウスが世俗的な幸福にも恵まれ、また社会的な活動において公正で寛容であったという無署名論評の叙述は、サン・ランベールによる評価やディドロの記した『《精神論》への考察』とも合致する。とはいえ、『文芸通信』にはエルヴェシウスの心酔者や一族の人達からは、けっして語られない描写が見出される。エルヴェシウス夫人を絶世の美女と称讃する文献は少なくないが、彼もまた眉目秀麗な貴族であり、たえず様々な女性から愛されたと伝えられる。しかし、この哲学者の浮気の対象や愛情の消長を仔細に追跡する仕事は、『人間論』を学問的に検討する作業より、はるかに困難と感じられる。だが、おなじ無署名論評が下記の叙述を含むことは、エルヴェシウスの研究者にとってもやはり幸運である。

「エルヴェシウスにおける支配的な情念は、女性に対する情熱であり、若いときは過度にいたるまでそれに身を委ねた。みずから語るのを聞いたが、長年のあいだ女性

への情熱が一日の最初と最後に置かれた規則ただしい活動であり、その中間にも適当な機会を有していた。(中略) 典雅な風采は彼に成功をもたらした。まずドトレ伯爵夫人の庇護のもとに初陣を飾る。この女性は無神論にかぶれており、ジャンセニズムやモリニズムにかぶれた女と同様に雄弁家でかなり風変わりであった。ついでショルヌ公爵夫人の公認の愛人となる。彼女もまた天成の雄弁家であり、ひとつならず情事を隠していた。そのためでもなかりうが、公爵夫人の愛人も別の色事へと発展し、ほかの娘たちをも意のままにした。(中略) 不節制の結果としてよく襲われるように、彼はながいあいだ痛風のため具合が悪かった。エルヴェシウスの痛風はとくにたちが悪く、頭部や胸部や胃腸が休みなく痛み、ついには両腕両脚まで侵された。青春の快楽を奔放に燃やしたことが、エルヴェシウスの生命を縮めたと世人はいう。いつも彼はどこかの娘と会っており、巷間の噂によれば、衰えはじめた精力を保持するために秘薬を用いた。これこそ確実に自己を殺す手段にほかならない。」^(註52)

エルヴェシウスの放埒な日常や急死の原因について、無署名論評の説明が信頼に足るか否かは判断できない。しかし、こうした噂話がパリのサロンや『文芸通信』の関係者の間で、囁やかかれていたことは事実であろう。同年の11月15日号は刊行された哲学詩『幸福』の書評を掲載している。^(註53) エルヴェシウスがデュタンに書いた二通の手紙が、ヴォルテール宛の書簡として発表されるのもこの号である。

『人間論』は1773年の春にハーグで上梓されたが、その報告と批判は同年11月号にはじめて現われる。すでにディドロは7月および8月の手紙において、『文芸通信』の協力者のひとりデピネ夫人に、『人間論』の重要さを知らせた。とはいえ、今回の無署名論評は1758年のグリムによる紹介と変わらず、エルヴェシウスの作品に高い評価を与えてはいない。

「エルヴェシウスの遺作に関して言えば、いまだにパリではきわめて僅かな部数しか見当らず、やがて出廻るとの見通しもない。赦し難いほど勝手に聖職者と宗教を論じているため、この著作も厳しく禁止されたままに止まるであろう。これが最後の作品として著者の名声を挙げるとすれば、彼が大変に誤まった観念を論証しようと努めつつ、若干の美しい真理を発見したことによる。《人間論—人間の精神的能力と教育》。これがその題名である。」^(註54)

無署名論評は直截単純であり、こうした書評の執筆者が実際にエルヴェシウスの作品を読んだらうか、とカーンは疑っている。^(註55) ディドロは『《精神論》への考察』で示した観点を維持しながら、多面的に『人間論』を解明し、はるかに慎重で好意的な評価を残した。多くの人々は『精神論』や『人間論』を読まずに、『《人間論》への反駁』を通してエルヴェシウスを知り、これもまた大部に過ぎるので『《精神論》への考察』や無署名論評を頼りに判断する。私たちの課題は、こうした批判や書評をどう位置づけるかであろう。『文芸通信』は1773年12月号でも『人間論』について記している。

「エルヴェシウスの作品は投遣りで気紛れな仕方では書かれている。もっとも咎めるべきは、執念深い憂うつと怨嗟が全巻を支配していることである。万事が思うように行かないことに憤慨した不幸な人間がここに見出される。こうした光景はみるに耐えず、著者の判断をきわめて不公平にする。さらにこの書物はさまざまな矛盾に充ちている。偉大な真理も正しくない観念も含まれ、卓抜な考えも陳腐な事柄も述べられて

いる。ときには微細で冗長にすぎ、ときには深刻で雄弁である。このように全体が渾沌としているため、読者は脳裡に順序だてて見取図を画くことができない。それは読者が悪いからではないと信ずる。著者は当りまえの原理をくどくど論じている。真理を認識させ、論述を展開してほしい事柄には軽く触れるだけ。後世の人々がエルヴェシウスを単純に体系的な文筆家のなかに分類することを、彼のために私は怖れる。崇高なことをくどくど述べる素人の作者をば赦して頂きたい。この種の書物(註56)を十巻も抱えるより、魅力的な小ガリアニ師の十行を読むほうが私は好きである。」

こうして『文芸通信』がエルヴェシウスの生活や作品に、関心を示し続けたことは確かである。しかし、これらの無署名論評とディドロの作品の間には、『人間論』への分析や評価において著るしい隔たりがみられる。1773年の時点から『《人間論》への反駁』が連載される1783年までの十年間に、ディドロはマイステルやデピネ夫人とどのような打ち合せを行なったであろうか。現在のところこれを明らかにする資料は発見できない。

『人間論』や『《人間論》への反駁』が刊行される経緯を述べて、思いがけず多くの紙幅を費やした。さまざまな稿本や版本を調べる目的は誤字脱落をただすぐらいに当初は考えていたが、著者を取巻く複雑な社会状況や錯綜した人間関係を解明する手掛りとなるように感じられる。しかし、ひとつの問題が解かれると、また新しい謎がいくつか生まれる。次回は『《人間論》への反駁』の内容に考察を向けることを約束する。

(昭和56年8月31日受理)

(註)

- 1) たとえば, Keim, A., *Helvétius, sa vie et son oeuvre*, Paris, 1907. pp.507, 716. あるいは, Cumming, I., *Helvetius, his Life and Place in the History of Educational Thought*, London, 1955. pp.139, 238.
- 2) D'Alembert, J., *Oeuvres*, Paris, 1825. Tome V, p.328.
- 3) Saint-Lambert, J.-F., "Essai sur la vie et les ouvrages d'Helvétius." Helvétius, C.-A., *Oeuvres complètes*, Paris, 1795. Tome I, p.119.
- 4) Smith, D.W., "A Preliminary Bibliographical List of Editions of Helvetius's Works." *Australian Journal of French Studies*, Melbourne, 1970. Volume VII, No.3, p.334.
- 5) *Correspondance littéraire, philosophique et critique*, par Grimm, M., Diderot, D., Raynal, G.-T., Meister, J.-H., etc, éd. Tournoux, M, Paris, 1879. Tome IX, p.103.
- 6) Smith, op. cit., p.334.
- 7) 『人間論』の序文の一節には、1771年に書かれた文章がみられる、とルフェーブル・ラロッシュは指摘する。Lefebvre de La Roche, L., "Avertissement." Helvétius, *Oeuvres complètes*, Paris, 1795. Tome I, pp.xiv, xvij.
また、ケラーの作成した権威ある文献書誌『文芸フランス—書誌辞典』は、1767年にドイツ人に手渡された草稿が、はたして『人間論』初版の底本であろうかと疑問に付している。
- 8) Tourneux, M., *Diderot et Catherine II*, Paris, 1899. pp.63, 64.
- 9) Smith, op. cit., p.333.
- 10) Ibid., pp.336-339.
- 11) Lefebvre de La Roche, op. cit., Tome I, pp.vii, viij.
- 12) Diderot, D., "Voyage en Hollande." *Oeuvres complètes*, éd. Assézat, J., Paris, 1877. Tome XVII, p.443.
- 13) Morley, J., *Diderot and the Encyclopaedists*, London, 1923, Volume I, pp.91, 92.

- 14) Tourneux, op. cit., p.65.
 なお、『人間論』No.1の巻頭には、刊行者からカザリン二世に宛てた献辞が付せられている。この献辞は、ディドー版をはじめ、その後の版本では削除されることが多い。『人間論』の上梓とロシア女帝との関係は、今後検討すべき課題のひとつである。オランダでの出版にルフェブル・ラロッシュが不満を抱いたのも、この問題に関わるのではないか。
- 15) Madame de Vandeul, "Mémoire pour servir à l'histoire de la vie et des ouvrages de Diderot." Diderot, *Oeuvres complètes*, éd. Assézat, Paris, 1875. Tome I, pp.LI, LII.
- 16) Tourneux, op. cit., pp.65, 66.
- 17) Diderot, *Correspondance*, éd. Roth, G., et Varloot, J. Paris, 1970. Tome XIII, pp.46, 47.
- 18) Smith, op. cit., pp.335, 339.
- 19) *Correspondance littéraire*, éd. Tourneux. Tome X, p.307.
- 20) これについては、次の書物が詳しい。Dolle, J.M., *Politique et pédagogie, Diderot et les problèmes de l'éducation*, Paris, pp.175-176.
- 21) この時期におけるディドロとカザリン二世との往復書簡については、Diderot, *Correspondance*, Tome XIV, pp.172-177, 181.
- 22) Tourneux, op. cit., pp.483, 484.
- 23) Assézat, J., "Notice préliminaire." Diderot, *Oeuvres complètes*, éd. Assézat. Tome XII, p.266.
- 24) Desné, R., "Les Leçons inédites de la réfutation de l'Homme d'après le manuscrit autographe de Diderot." *Diderot Studies*, Genève, 1968. Volume X, pp.35, 36.
 著者の思想と技法を厳密に評価するには、これらの異文を放置してはならない、とデスネは言う。
- 25) Diderot, *Oeuvres complètes*, éd. Lewinter, R., Paris, 1971. Tome XI, p.465.
- 26) 野沢協訳、エルヴェシウスの〈人間論〉の反駁（抜粋）、および小場瀬卓三による解説、(ディドロ著作集、第二巻哲学Ⅱ、法政大学出版、1980年)
- 27) Assézat, "Notes." Diderot, *Oeuvres complètes*, éd. Assézat, Tome I, p.LXVI.
- 28) Dieckmann, *Inventaire du fonds Vandeul et inédits de Diderot*, Paris, 1951. pp.12, 27, 28, 63, 146.
- 29) Kølving, U., "Introduction." Grimm, M.G., *La Correspondance littéraire, 1er janvier—15 juin 1761*, Uppsala, 1978. Tome II, pp.5, 6.
- 30) Tourneux, "Avertissement." *Correspondance littéraire*, éd. Tourneux. Tome I, p.5.)
- 31) Booy, J., "Inventaire provisoire des contributions de Diderot à la Correspondance littéraire." *Dix-Huitième siècle*, Paris, 1969. No.I, pp.354-356.
- 32) Vernière, P., "Introduction." Diderot, *Oeuvres complètes*, éd. Lewinter. Tome XI, pp.456, 465.
- 33) *Correspondance littéraire*, janvier 1783—mars 1786, Bibliothèque historique de la Ville de Paris, mss. 3868-3870.
- 34) Smiley, J.R., *Diderot's Relation with Grimm*, Urbana, 1950, p.1.
- 35) *Correspondance littéraire*, éd. Tourneux. Tome II, p.272.
- 36) Smiley, op. cit., p.2.
- 37) Kølving, op. cit., Tome II, pp.25, 26.
- 38) Smiley, op. cit., p.3.
- 39) Hallgren, A., "Introduction." Grimm, *La Correspondance littéraire, 1er janvier—15 juin 1763*, Uppsala, 1979, Tome II, pp.21-29.
- 40) Tourneux, "Notice préliminaire." *Correspondance littéraire*, éd. Tourneux. Tome II, p.231.
- 41) 中川久定著、ディドロの『セネカ論』、岩波書店、1980年、pp. 382-383
- 42) Booy, J., op. cit., pp.382-395.
- 43) Smiley, op. cit., pp.116, 117.
- 44) *Correspondance littéraire*, éd. Tourneux. Tome XIV, p.17.

- 45) Ibid., pp.17, 18.
- 46) Madame de Vandeuil, op. cit., Tome I, pp.LVII, LVIII.
- 47) たとえば, Morley, op. cit., Volume II, p.246. あるいは, Bibliothèque Nationale, *Diderot 1713-1784*, Paris, 1963. p.XIV.
- 48) Diderot, D., *Correspondance*, Tome XV, p.339.
- 49) Keim, op. cit., pp.425, 426.
- 50) Tourneux, "Notice préliminaire." *Correspondance littéraire*, éd. Tourneux. Tome II, p.231.
- 51) *Correspondance littéraire*, éd. Tourneux. Tome IX, pp.418, 419.
- 52) Ibid., Tome IX, pp.419, 422, 423.
- 53) Ibid., Tome X, pp.102, 103.
- 54) Ibid., Tome X, p.307.
- 55) Keim, op. cit., p.425.
- 56) *Correspondance littéraire*, éd. Tourneux. Tome X, p.323.